

第2表出土土器観察表(2)

掲載頁	図番号	掲載番号	出土遺構	種別器種	法量():復元			色調		焼成	調整		胎土(上:大きさ、下:量)		備考	
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	A	B		
								にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4		糸切底	回転ナデ	2mm 微			
16	16	41	溝状遺構	土師器皿				にぶい褐 7.5YR5/3	灰黄褐 10YR5/2	良好	ナデ、指 押さえ	ナデ	3mm 微			
		42	溝状遺構	土師器口縁部				にぶい褐 7.5YR5/3	黄灰 2.5Y4/1	良好	回転ナデ、 ヘラケズリ	内黒、 ミガキ	3mm 多			
		43	溝状遺構	土師器内黒土器	(10.3)			灰 7.5Y4/1	灰オリーブ 7.5Y6/2	良好						
		44	溝状遺構	陶器底部	(10.8)											
17	17	45	上層	染付椀		(4.5)				良好	施釉	蛇の目釉 はぎ				
		48	上層	土師器布痕土器	(12.2)			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 5YR6/4	良好	ナデ	布目压痕				
		49	上層	須恵器甕				灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	格子目 タタキ	同心円文 タタキ	微細 少			
		50	上層	施釉陶器壺						良好						

第3表 出土土製品観察表

掲載頁	図番号	掲載番号	出土遺構	種別器種	色調		備考
					外面	内面	
7	6	1	豎穴建物1	土師質羽口	にぶい橙 7.5 YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	下端部に鉄 滓、周辺が 熱変色
		2	豎穴建物1	鉄滓	オリーブ灰	にぶい褐	羽口に付着 した鉄滓の 剥落
		3	豎穴建物1	鉄滓	にぶい褐	黄灰	羽口に付着 した鉄滓の 剥落
13	13	35	豎穴建物1	鉄滓	オリーブ灰	にぶい褐	鉄滓

第4表 出土石器観察表

掲載頁	図番号	掲載番号	出土遺構	種別器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
8	7	6	豎穴建物1	砂岩 敲石	6.1	5.6	4.0	206.0	全面被熱。 表面に敲打痕
11	9	22	豎穴建物1	砂岩 敲石	10.2	5.7	4.7	340.0	全面被熱。 表面に敲打痕
		23	豎穴建物1	砂岩 台石	8.9	6.5	6.1	—	
		24	豎穴建物1	砂岩 台石	8.7	9.4	2.2	182.0	成形痕あり
		25	豎穴建物1	凝灰岩質 敲石	7.8	5.6	3.7	111.5	表裏に成形痕あり
13	13	36	豎穴建物2	軽石製品	5.3	2.2	4.2	19.0	全面に成形痕あり
16	16	46	上層	軽石製品	5.8	3.9	2.1	14.8	
		47	上層	軽石製品	4.9	4.9	4.6	19.0	

第IV章 まとめ

今回実施した発掘調査は、調査前の豎穴建物で検出された遺構は、豎穴建物2軒、掘立柱建物1棟、古代、及び中世の溝状遺構、ピット群である。

豎穴建物1は、遺構内土坑の出土須恵器がMT85併行段階であることや、南西部出土の土師器が今塩屋氏・松永氏の編年案(今塩屋・松永2002)では6期に当たる。これらの理由から、使用もしくは埋没は5世紀前半と考えられる。豎穴建物1の東部には焼土の集中が認められた。周辺から鉄滓や羽口が出土し、遺構内から赤変した台石も出土することから、鉄製品の製造(鍛冶)を行った可能性が高い。焼土集中部には火床を思わせる小規模かつ浅い窪みが点在することもそれを示している。ただし大半が現代の削平を受けているためその詳細は不明である。遺構南西部では床面付近より土師器を中心に遺物が多く出土する。一括廃棄と呼べるほどの密度ではないが、南壁の一部をオーバーハング状に掘削した痕跡も含めて、遺構廃絶時の儀礼行為による可能性が考えられる。また遺構内から検出された土坑は、埋土中から須恵器が確認された。豎穴建物南辺の中央に土坑を持ち、須恵器が出土する例は北中遺跡だけでなく大町遺跡からも確認されていることから、共通した儀礼的行為が行われたと考えられる。またこの土坑は

堅穴建物構築時に掘られていることから、堅穴建物の時期を決定する際の有効な材料となり得るのではないだろうか。

堅穴建物 2 の出土土師器は、前述の土師器編年に従えば 6 ~ 7 期に埋没したと考えられる。遺構の中央付近で検出された土器埋設炉は、浅い窪みに球形を呈する胴部を持つ壺の口縁部・頸部を設置したものであり、今塩屋氏の分類（今塩屋 2004）によると VII-a 類にあたる。また、遺構東部からは壺の胴部上半部を確認した。壺形土器は土坑を伴っているが大半を大溝によって削平されており、堅穴建物との時間的関係や構築の意図は不明である。

掘立柱建物 1 は、遺構の切り合いより堅穴建物 2 の埋没後に構築されたことは明らかであるが、時期比定の可能な遺物がないため不明である。大溝により消失した可能性が高いと考えられるものの、柱穴の配置がやや歪であり規格性に乏しいことや、布掘りを伴わない柱穴であることから、4 次調査で検出されたような掘立柱建物とは異なる性格の施設と考えるのが自然であろう。

調査区内で検出された溝は、調査区北部～中部において検出された小規模の溝と、調査区南部において検出された大溝の二種に大別できる。小規模の溝は堅穴建物の埋没後に構築されており、古墳時代後期～古代の所産と考えられる。溝は調査区内で何度も交差しているが、埋土の違いが殆ど認められないことから、洪水等により埋没するのたび掘り直されたと考えられる。一方南部の大溝は中世以降に構築されており、土層断面から中世～江戸時代にかけて埋没しながら何度も掘り返されたことが窺い知ることができる。

調査区北部より検出された小ピット群は用途は不明であるが、堅穴建物 1 の検出面で確認されたため、古代以降の構築である。

北中遺跡は、過去四度にわたり発掘が行われている。その結果、5 次調査で確認された堅穴建物は古墳時代集落の最盛期に当たる。鍛治の可能性のある痕跡も含め、集落を構成する一要素を成していたのであろう。

それ以後も、古代から近世に至るまで遺構が認められることから、調査区内は北中地区の微高地の一角として長く生活の場として使用された事が、調査を通して明らかとなった。

(参考文献)

今塩屋毅行 松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器—宮崎平野部を中心にして—」
『第5回九州前方後円墳研究会 古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—発表要旨資料』

今塩屋毅行 2004「南部九州古墳時代の火處—「土器利用炉」に着目して」『福岡大学考古学論集』

宮崎市教育委員会編 1998『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 33 集

宮崎市教育委員会編 1981『浄土江遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第 6 集

宮崎市教育委員会編 1993『浄土江遺跡Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第 25 集

宮崎市教育委員会編 1998『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第 33 集

宮崎市教育委員会編 1999『北中遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第 38 集

宮崎市教育委員会編 2002『北中遺跡Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第 51 集

宮崎市教育委員会編 2003『宮脇第 2 遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第 55 集

宮崎市教育委員会編 2003『北中遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第 56 集

宮崎市教育委員会編 2018『北中遺跡（4 次）』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第 121 集

宮崎市教育委員会編 2018『大町第 2 遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第 117 集